

メッセージアウトライン サムエル記第一2:1～36

「エリの家罪」

エフライムの山地ラマタイム出身のエルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといった。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。ペニンナはハンナに子がいないことのゆえに、いつも彼女を苦しめ、苛立たせ、悲しませていた。ハンナはシロの主の宮に家族で上った時に、食事もせず主の前に自分の苦しみ、悲しみ、憂いを打ち明け、心を注ぎだして祈った。その中で彼女は、もし主が男の子を下さるなら、その子を一生の間、主にお渡ししますと誓願をかけた。ハンナの祈りを主なる神は聞かれ、彼女は男の子を産み、その子はサムエル(「神から求めた者」あるいは「神の名」と名づけられた。サムエルが乳離れしたときにハンナは主の宮に上り、祭司エリにその子サムエルを委ねた。

[1-10]この箇所はハンナの主なる神への賛美と喜びと感謝の祈りである。

主なる神は聖であり、唯一であり、全知である。(1-3) 主は高ぶる者を低くされ、弱い者、貧しい者を引き上げ、栄光の座に着かせられる。(4-8)「不妊の女が七人の子を産み」(5)とは七が完全数であるので多くの子を産むという意味。実際ハンナはこの後、五人の子を産む。(21) 敬虔な者たちを守られ、悪者ども、はむかう者をさばかれる。(9-10)

[11]「エルカナはラマにある自分の家に帰った。幼子は、祭司エリのもとで主に仕えていた」

サムエルは母ハンナや家族のもとから離れ神の宮で仕える者となった。母はこのことを、彼が生まれた時からよく言い聞かせていたであろうが、幼子サムエルにとって、それはさみしく、悲しい思いで一杯であったであろう。彼の世話は神の宮で仕えていた女たちがしてくれたのであろう。 [12-17]「さて、エリの息子たちはよしまな者たちで、主を知らなかった」(12)

主なる神に仕える祭司の息子たちが主を知らなかったということは恐るべきことである。これは神を恐れず、神との正しい関係にないということである。祭司エリは彼らを甘やかし、忙しさにかまけて、モーセ以来の主の掟、律法を教えていなかったのであろうか。それなのに彼は息子たちを祭司にした。

神を信じ、神に従う信仰者は家庭もよく治め、主を愛し主を恐れる者として育てていくことが大切である。→箴言29:17, 21、13:1

「民に関わる祭司の定めについてもそうであった。だれかが、いけにえを献げていると、まだ肉を煮ている間に、祭司の子弟が三又の肉刺しを手にしてやって来て、

これを大鍋や、釜、大釜、鍋に突き入れ、肉刺しで取り上げたものをみな、自分のものとして取っていた。このようなことがシロで、そこに来るイスラエルのすべての人に対してなされていた。その上、脂肪が焼かれる前に祭司の子弟がやって来て、いけにえを献げる人に、『祭司に焼くための肉を渡しなさい。祭司は煮た肉をあなたから受け取らない。生の肉だけだ』と言うので、人が『まず脂肪をすっかり焼いて、好きなだけお取りください』と言うと、祭司の子弟は、『いや、今渡すのだ。でなければ、私は力づくで取る。』と言った。このように、子弟たちの罪は、主の前で非常に大きかった。この人たちは主へのささげ物を侮ったのである(13-17)

「脂肪が焼かれる前に」(15)とは正当に神に献げられる前にと意味。彼らは私利私欲のために、神に献げられるべきものを横取りしていたのである。

[18-21]「さてサムエルは、亜麻布のエポデを身にまとった幼いしもべとして、主の前に仕えていた。彼の母は彼のために小さな上着を作り、毎年、夫とともに年ごとのいけにえを献げに上って行くとき、それを持って行った。エリは、エルカナとその妻を祝福して、『主にゆだねられた子の代わりとして、主がこの妻によって、あなたに子孫を与えてくださいますように』と言い、彼らは自分の住まいに帰るのであった。

主はハンナを顧み、彼女は身ごもって、三人の息子と二人の娘を産んだ。少年サムエルは主のみもとで成長した」

「エポデ」とは肩から掛け、腰のあたりを帯で結んだ(諸説あり)祭司用の服である。→出エジプト28章 一般の祭司たちは大祭司の着けたものとは違う装飾のない簡単な亜麻布の衣服であった。サムエルの身にまとっていたものもそのようなものであったであろう。

母ハンナはサムエルの成長を思い、毎年宮に上るたびに彼のために小さな上着を作って持って行った。離れていても、主にささげたととしても、母と子の絆は切れることはない。

祭司エリはエルカナの家族が宮に上って来た時、彼と妻ハンナに、サムエルの代わりに主がこの妻によってあなたに子孫を与えてくださるようにと祝福した。そして確かに主は彼女を顧み、三人の息子と二人の娘を与えてくださったのである。主によって低い者が高くされ、高ぶっていた者が低くされる人生の逆転である。→2:1-10

[22-26]「さて、エリはたいへん年をとっていたが、息子たちがイスラエル全体に行っていることの一部始終を、それに彼らが会見の天幕の入口で仕えている女たちと寝ていることを聞いていた。それでエリは彼らに言った。『なぜ、おまえたちはそんなことをするのか。私はこの民の皆から、おまえたちのした悪いことについて聞いているのだ。息子たちよ。そういうことをしてはいけない。私は主の民が言いふらしているうわさを聞くが、それは良いものではない。人が人に対して罪を犯すなら、神がその仲裁をしてくださる。だが、主に対して人が罪を犯すなら、だれがその人のた

めに仲裁に立つだろうか。』しかし、彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。彼らを殺すことが主のみどころだったからである。一方、少年サムエルは、主にも人にもいつくしまれ、ますます成長した」

ここではエリの息子たちとサムエルが対比されている。

エリの息子たちの罪 ①貪欲の罪(14) ②神より自分を先にする罪(16) ③不品行の罪(22) ④父の忠告を聞かない罪(25)

よこしまな者であったから、主を知ろうとしなかったのか、主を知らなかったから、よこしまな者になったのか。→(12) どちらにしても神に仕える祭司として子どもたちを躰けなかったエリの責任は大きい。→箴言29:21

「彼らを殺すことが主のみどころ」…主は決して悪者が滅びるのを望んではおられない。→エゼキエル18:23 しかし、あくまで頑なな心で歩み、主を知ろうとせず、悔い改めず、肉の欲望のままに生きる者はそれにふさわしい結末を用意される。

→ヨハネ12:37-40、ローマ1:24,26、9:15-20

それに対してサムエルは主にも人にもいつくしまれ、正しく成長していった。祭司エリも息子たちのことがあるので、サムエルを主なる神に仕えるべき者として、しっかり教え、躰けていったことであろう。また母ハンナも父エルカナも彼のためにいつも祈っていたことであろう。

[27-29]「神の人がエリのところに来て、彼に言った。『主はこう言われる。あなたの父の家がエジプトでファラオの家に属していたとき、わたしは彼らに自分を明らかに現わしたではないか。わたしは、イスラエルの全部族からその家を選んで私の祭司とし、私の祭壇に上って香をたき、私の前でエポデを着るようにした。こうして、イスラエルの子らの食物のささげ物をすべて、あなたの父の家に与えた。なぜあなたがたは、わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住まいで足蹴にするのか。なぜあなたは、わたしよりも自分の息子たちを重んじて、私の民イスラエルのすべてのささげ物のうちの、最上の部分で自分たちを肥やそうとするのか。』」

「神の人」とは神から遣わされた人の意で、預言者のこと。詳細は不明。→士師記6:8

この神の人の告げることばは、これから展開されるエリの一族に関する歴史の予告的解説になっている。27-29節では、エリは祭司の一族としての選びにもかかわらず、神よりも自分の息子たちを重んじ、民のささげ物を軽んじ、私腹を肥やそうとした冒涇と貪欲の罪が指摘されている。

[30-32]「それゆえ、一イスラエルの神、主のことば—あなたの家と、あなたの父の家は、永遠にわたしの前に歩むとわたしは確かに言ったものの、今や—主のことば—それは絶対にあり得ない。わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む

者は軽んじられるからだ。見よ、その時代が来る。そのとき、わたしはあなたの腕と、あなたの父の家の腕を切り落とす。あなたの家には年長者がいなくなる。イスラエルが幸せにされるどんなときにも、あなたはわたしの住まいの衰退を見るようになる。あなたの家には、いつまでも、年長者がいない」

「…永遠にわたしの前に歩むとわたしは確かに言った」→出29:9、民数記25:13
しかし、この約束はエリとエリの家には適用されなくなった。

「腕を切り落とす」…「腕」とは力の象徴であり、それが切り落とされるということは、神のさばきが下り、衰退し、勢力がなくなるという意味。

「年長者がいなくなる」…長生きする者がいない。神の祝福が去ることの象徴。

「わたしの住まいの衰退を見る」…契約の箱が敵に奪われ、神の宮があったシロが荒廃する。→エレミヤ7:12,14,26:6,9

[33-34]「わたしは、あなたのために、わたしの祭壇から一人の人を断ち切らないでおく。そのことはあなたの目を衰えさせ、あなたのたましいをやつれさせる。あなたの家に生まれてくる者はみな、人の手によって死ぬ。あなたの二人の息子、ホフニとピネハスの身に降りかかることが、あなたへのしるしである。二人とも同じ日に死ぬ」

「一人の人」とはエリ家の者の一人である。エリの家系を下ると、ピネハス→アヒトブ→アヒメレク(アヒヤ)となり(Ⅰサム14:3, 22:9)、このアヒメレクの時代にアヒメレク及び他の祭司たち八十五人が殺された。しかし、アヒメレクの息子エブヤタル一人だけが逃れてダビデのもとに行き、そこで祭司としての働きを続けることができることになった。→Ⅰサムエル22章

ホフニとピネハスの死は→4章

[35-36]「わたしは、わたしの心と思いの中で事を行う忠実な祭司を、わたしのために起こし、彼のために確かな家を建てよう。彼は、わたしに油注がれた者の前をいつまでも歩む。あなたの家の生き残った者はみな、銀貨一枚とパン一つを求めて彼のところに来てひれ伏し、『どうか、祭司の務めの一つでも私にあてがって、パン一切れを食べさせてください』と言う」

エブヤタルはダビデ王の息子アドニヤのクーデターに加担したためにダビデ王の後を継いだソロモン王から罷免される。→Ⅰ列王1:7, 2:26~27 そしてエブヤタルとともに祭司として仕えていたツァドクが祭司職を継ぐ。→Ⅰ列王2:35 ツァドクの系図は→Ⅰ歴代6:1~8

油を注ぐとは、王に即位する時の儀式であり、祭司や預言者が行う。それで「油注がれた者」とはイスラエルの王を意味する。そしてそれはダビデの子孫としてやがて来られる救い主イエス・キリストを指し示すものでもある。

エリの家系は衰退し、神のみこころを忠実に行う祭司が立てられるとの預言がなされた。そしてそれは実現していく。

自分の子を愛し、いつくしむのは良い。しかし、それは親の言うことを聞かず、罪深い生き方に走る子どもを育てるということではない。信仰者は神を恐れ、神を愛し、神に従う生き方の模範を示し、また、みことばに従って子を教えていかなければならない。

少年サムエルは家系に誇るべきものもない、ごく普通の家庭の子であったが、母ハンナはその子のために産まれる前から祈り、主に献げ、主に仕える者として物心つく前から教え、育てた。三つ子の魂百までと言われるが、小さい頃に教えられたことはしっかりと根付き、人生の方向を教える。祈られている子、神に従う温かい家庭で育つ子は、また神に愛され神に用いられる人になる。私たちが祭司エリのように主のさばきを受ける者となるのではなく、少年ながら素直に主に仕えたサムエルのように主のみこころにかなった生き方に励む者になりたい。